



コーヒー牛乳

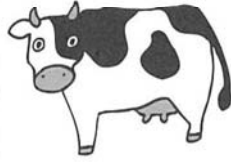
きたの だいち

もはや旧聞に属する話だが、都会の小学生に魚や鶏の絵を描かせる時、魚は切り身に、鶏は四本足にするという。まるで江戸時代の殿様のような御仁たちである。

かつてはこの農家でも、いや、街なかの家でさえも鶏を飼っていた。放し飼いの鶏を追いかけてまわして遊び相手にし、草むらに産み落とした卵を拾い集めもした。野菜畑ではとげのある大根の葉を両手でつかんで引き抜き、泥を拭い落としてはかぶり付き、海や川へ行つて魚臭を手に滲ませたのも、そう遠い話とは思えないのだが、それがいまやスーパーの店頭では思わず頼ずりしたくなるような大根が棚を占領し、魚はおろされ、鶏肉は小分けされてトレーに収まってしまった。野菜類はさほどでないにしても、食べ物のお原形を目にすることが殊に失せてしまったことから、無理からぬ話かもしれない。

それに拍車をかけるのが、外食機会の増加と広範に品揃えする中食食品である。これは調理済みであることから、いとも簡単に食事を摂ることができ、台所仕事も際立つて清潔になり生ゴミが減り時間も短縮された。だが、それらとは裏腹に失ったものが多く、食育という言葉がちかごろもて囃されている。これは最近の造語に違いないと思つていたが、案に相違して一世紀も前に村井弦斎がその小説「食道楽」に、「小児には徳育よりも知育よりも体育よりも、食育が先。根元は食育にある」と記している。

農業関係の教育施設や研究所には専門家を言めて多くの人が訪れる。そこで教鞭をとる知人が興味深い話を聞かせてくれた。ある日のこと地元の小生たちが牧場見学にやってきた。草を食む羊や牛の群れをまぢかで見ながら説明を受けたのち、牛舎に足を運ぶとそこでは乳を搾っていた。その作業を見ていた子供たちの中の一人が、



徒然 つれづれ

「はいー」
手を上げて、目を輝かせながら訊ねてきた。

「デザートは食べるのですか？」
水と塩は与えるよ、と応えると、

「コーヒーは飲ませるのですか？」
と別の子から、ふたたびデザートの問題がきた。その話はいま応えたばかりじゃないか、というような表情を浮かべたのだから、

う、
「コーヒー牛乳をつくる時には、コーヒーを飲ませるのですか？」

しっかりと口調で再度聞いてきた。地元とは道東の農村、本別のことである。問われた知人は気を静めてにこやかに応えながらも、もう一方の頭ではインクビンに活けたスズランの花を連想していた、と話してくれた。



子供たちだけでなく、大人も生産についての知識がたしかに希薄である。見て、聞いて、触れて、汗を拭うことにより、消費

者自らが食の全体像を描けるようにする、これが肝要なのだろう。汗を掻いてみると、そこはかとなく嬉しさが込み上げ、けっこう気高くなったような気にもさせてくれる。

